一人相撲

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
一人相撲

【Ｎコード】
Ｎ７６７６Ｄ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
敬三は苑子さんにアタックしようと決意した。それで馬鹿げた特訓を開始するのだが肝心の苑子さんはというと。学園コメディーです。

第一章

一人相撲

相良敬三は決めた。言う前にもう決めていた。
「ハートを磨くっきゃない！」
「いきなり何だってんだ」
「遂に頭にきたのか？」
急に教室で立ち上がって宣言した彼に対してクラスメイト達は実に冷ややかな声をかけるのであった。
「違う、俺は決めたんだ」
「病院に行くことをか」
「手遅れだけれどいいんじゃねえのか？」
彼等の声はまだ冷たいものであった。
「早く行け」
「それで少しは頭をよくしてもらえ」
「御前等俺を何だと思ってるんだ？」
ここまで言われていい加減敬三もむっときて彼等に問うた。茶髪を短くしてもみあげを伸ばしている。背が高く顔は男らしい。バタ臭い感じだが結構男前であった。
「馬鹿に決まってるじゃねえか」
「それかアホか」
「どっちも悪口じゃねえか」
それ以外に聞き間違えようのない言葉であった。
「何なんだよ、それって」
「御前この前のテストの平均点何点だ？」
「二十点だ」
敬三は皆に答える。
「それがどうかしたのかよ」
「だからだよ。それに」

「それに？」
「何でいきなりハートを磨くっきゃないなんだよ」
「何処の芸能事務所のタレントさんなんだ」
彼等の突っ込みは実に容赦がない。
「それか元テニス選手かミスターの息子さんか」
「俺はそこまで酷いか？」
「自覚しろ」
彼等の突っ込みは鋭さを増すばかりであった。
「そのレベルまでいってるよ」
「どういう頭の構造しているんだ」
「俺は正常だ」
敬三の返答は実に説得力のないものであった。
「それでどうしてこう言われるんだか」
「じゃあそういうことにしておいてやるよ」
「それでだ」
「ああ」
クラスメイト達はとりあえずは敬三の話を聞くことにした。だがこれは決して友情などといったものではなく諦めや好奇心からくるものであった。実に複雑だがそれ以上に彼に対する同情心というものが一切ないものであった。
「で、何でハートを磨くんだ？」
「お坊様になるつもりか？」
「俺の家は神道だ」
本人曰くそうらしい。
「なるんだったら神主だな」
「どんな神主になるつもりだ」
「ドラム缶にガソリンかけて爆発起こさせるつもりか？」
前述のとある元プロ野球選手が本当にしでかした話である。最も問題なのはこれが東映の特撮の話でも大映ドラマの話でもなく本当の話であるということだ。

「違う。とにかくな」
「話を戻すか」
「それでどうしたんだ？」
「二年三組の神藤苑子さんだ」
同じ学年の女の子だ。所謂可愛らしい女の子だ。黒髪をポニーテールにして童顔である。黒く大きな目とすらりとした脚がチャームポイントである。
「彼女をゲットする」
「そういえば神藤さんってまだ彼氏いなかったな」
「そういやそうだな」
皆敬三の爆弾発言を聞いて話し合う。敬三はここでまた宣言する。
「彼氏がいようが構うものか」
「いや、構うぞ」
「また暴走しているのかよ」
「惚れたら突き進むのみ」
しかし彼は人の話を聞かない。聞かないというよりは一切耳に入っていない。
「違うか？」
「やっぱり凄い馬鹿なんだな」
「壮絶なアホじゃねえのか？」
また皆敬三を評して言い合う。
「いや、馬鹿だろ」
「アホだって、こいつは」
「愛故に。君の為なら死ねる！」
今度は古典的な名台詞を吐く。
「だからだ。俺は彼女に釣り合う人間になる！」
またしても宣言するのであった。
「何があってもな」
「それでさっきの言葉か」
「ああ、俺は鬼になる」

言葉が実に訳のわからないものになっていた。何処かの涙腺が異常に緩いラグビーの先生のようであった。これで生徒を殴りながら泣けばそのままである。

「彼女の為にな」

「まあ馬鹿につける薬はねえが」

「アホだとしてもな」

クラスメイト達の意見はここでは一致した。

「やるだけやってみな」

「進化するかも知れないからな」

「全てにおいて。俺は超人になる」

それでも言葉は変わらない。

「何が何でも。今それを誓うぞ」

「まあ頑張れ」

「無理しても頭は無理だと思うがな」

クラスメイト達の冷たい醒めたエールが送られる。こうして彼の努力がスタートした。それは本気であり壮絶なものであった。

毎日二十キロのダンベルを持ってのランニングに筋肉トレーニング。食事も肉から野菜、小魚、玄米に変えた。そのうえ何と猛勉強まではじめたのだ。

「先生、ここはこれでいいですよね」

「あっ、うん」

敬三に質問された彼がドン引きしながら彼に応える。

「それでいいよ。それにしても相良君」

「何でしょうか」

「それ、東大の入試問題だよ」

見れば東大文一の赤本であった。彼はそれを使っているのであった。

第二章

「そんなのやってるんだ」
「駄目でしょうか」
「いや、いいけれど」
それを使っているのも驚きであるが先生が驚いているのはそれだけではなかったのだ。というよりはこれは驚いているのごく一部でしかなかった。
「しかも殆ど合っているし」
「俺には夢があるんです」
今度はキング牧師の言葉になっていた。
「夢？」
「はい、夢です」
彼は熱い目で語るのであった。
「俺の夢、それは」
「東大に行くとか？」
それはそれで確かに凄いことである。少なくとも今までの敬三のことを考えればこれは冒険や夢物語と言うべきようなことであった。
「まさかそんな」
「それは違うんだ」
「そんなちっぽけなことじゃありません」
彼にとってはそれは本当にちっぽけなことであった。本気でそう考えていた。
「俺の夢はもっとずっと大きいんです」
「大きな夢。何なのかな、それは」
「神藤さんです」
彼は高らかに先生に対して宣言した。
「神藤苑子さんです。彼女をゲットする為に」
「東大の問題をクリアーしていたの？」

「それもそのうちの一つです」
彼の中ではこうでしかなかった。
「一つでしかありません」
「そうなの。はあ」
「俺はやりますよ、先生」
彼は力瘤を入れてまた叫ぶ。
「絶対に彼女をゲットするんです、完璧な人間になって」
「そういえば君最近かなり何でも頑張ってるね」
このことでかなり有名になっているのは事実だ。それは学校中でかなり噂になっている。当然この先生もこれを知っていたのだ。
「それはそのせいだったの」
「そうです。別にいいですよね」
彼は先生に対して問う。
「彼女をゲットするのは」
「不順異性交遊じゃなければね」
先生もそれは認めるのだった。
「いいよ」
「俺の愛はただひたすら純愛です」
というよりかは周りを全く見ていないだけである。しかしそれはそれでかなり暴走しているのでそれが純愛にはしていると言えた。
「何があっても俺は」
「やるんだね。じゃあ頑張ってね」
「はいっ！」
威勢よく答える。
「俺はやりますから、見ていて下さい」
「何はともあれ努力するのはいいことよ」
先生もそれはよしとするのだった。
「頑張るのね」
「わかりました、それじゃあ」
何時の間にか勉強ではなく彼女のことに話がいっていた。彼はと

にかく本気で必死に努力をしていた。それはすぐに実を結びやがて結果となって出て来たのであった。
「御前がねえ」
「学年トップだったなんてな」
皆今回のテストの成績結果を見て驚くばかりであった。何とこれまで平均点二十点しかなかった彼がいきなり学年トップになったからだ。驚くのも無理はないことだった。
「しかも体力測定でも凄かったし」
「何が起こったんだよ」
「だから努力だ」
彼は言う。
「完璧になるって言っただろ。それをやっていたからな」
「だからそうなったのか」
「そうさ、けれどこれは通過点に過ぎない」
それが彼の考えであった。
「俺の目的はあくまでな」
「神藤さんってわけか」
「いよいよだ」
彼はまた力瘤を入れて誓う。
「彼女に告白だ。メイクもファッションもばっちり決めてな」
「そこまで考えていたのか」
「言っただろう？完璧になるってな」
言葉にも力がこもっていた。
「何があってもな。俺はやるぜ」
「まあやってみな」
「どっちにしろここまでやる人間って見たことねえぜ」
彼等にしろ驚くべきことであるのだ。
「応援はしねえけれどな」
「しねえのかよ」
「そうさ、ただ見てるだけさ」

これに関しては実に醒めた皆であった。
「俺達はな」
「まあいいさ」
敬三にしてもそれで構わなかった。彼にしてみても苑子をゲットできればそれでいいのだ。だからどうでもいいことでしかなかったのだ。
「それはな。とにかく俺は」
「やるのか」
「何があってもな」
またそれを宣言する。
「絶対にやってやる。彼女をゲットだ！」
教室での宣言であった。なお彼は隣のクラスにその人がいることも自分の声がどれだけ大きいかも気付いていなかった。基本的に頭の構造までは変わってはいなかった。

第三章

こうして今度はファッションを決めて告白することになった。話はどんどん進んでいた。というよりかは彼が勝手に一人で進めていたのであった。

「神藤さんっ」

「はい？」

隣のクラスを強襲して神藤さんのところに行く。そうして高らかに宣言する。

「今日の放課後ですけれど」

「放課後、ですか」

「そうです、体育館裏まで来て下さいっ」

大声で彼女に言うのだった。

「いいですか？」

「はあ」

神藤さんも少しきょとんとした顔で彼の言葉に応える。

「私はいいですけれど」

「いいんですね！？」

「はい」

彼の言葉にこくりと頷く。

「わかりました。それじゃあ」

「じゃあ今日の放課後に」

またそれを言う敬三であった。

「待ってますよ！」

「ええ」

ここまで言うとダッシュで自分の教室に戻る。そんな彼を隣の教室の皆は呆れながら見ているのであった。そうして彼等は口々に囁き合う。

「あいつひょっとして」

「気付いていないのかな」
「ねえ」
女の子達は神藤さんに声をかけてきた。
「彼、ひょっとして」
「あんたの考えに気付いていないのかしら」
「そうみたい」
神藤さんもそれに応える。
「やれやれ」
「自分だけでやってるのね」
女の子達は神藤さんの言葉を聞いて呆れるばかりであった。
「相手の気持ちも考えないで」
「何やってんだか」
「それでも」
けれどそんな友人達に対して神藤さんは言う。穏やかな笑顔で。
「今日なのね」
「相手の言葉だとね」
「一応そうらしいけれど」
「わかったわ」
その穏やかな笑顔でまた言う。
「それじゃあ」
すぐに化粧道具を出してメイクの手直しをするのだった。まるで何かを待っているように。クラスメイト達はそれを見てくすりと笑うのだった。
「まさか相良君もねえ」
「気付いていないんでしょうね」
「っていうか絶対気付いてないわよ」
そう言い合う。
「気付いていればもっと話は簡単に終わってるし」
「相手のことは目に入らないのね、彼」
それこそが敬三が敬三たる由縁であると言えた。ある意味非常に

わかりやすい人物ではある。同時に極めてはた迷惑な話でもあるが。
そんな話があることも知らずに敬三は自分の教室で派手に騒いでいた。
「よし、遂に今日だ！」
彼は席を立ち高らかに叫んでいる。
「今日こそは！本番の勝負だ！やるぞ！」
「それはわかった」
先生もそれには頷く。
「健全な若者は健全な恋愛を楽しむ、いいことだ」
「そうですよね、先生！」
先生にも満面の笑顔に力瘤を入れて叫ぶ。
「だったら俺は。勝負をかけますよ！」
「わかったから。しかしな」
「しかし！？何ですか」
「廊下に立ってろ」
しかし先生はこう言うのだった。
「へっ！？何でですか？」
「今は授業中だぞ」
そう先生に言われる。
「それで馬鹿騒ぎする奴が何処にいる」
「何処にって」
敬三は言われていることにすら気付かずに応える。
「ここにいますけれど」
「わかったから立ってろ」
先生は慣れているのか平然として敬三に言葉を返す。
「いいな。両手にバケツを持ってだ」
「またえらく古典的ですね」
「古典的で結構。俺の授業は古典だ」
だから言うのだった。
「いいな。立ってろ」

「それじゃあそういうことで」
平然として廊下に出て立つ。しかし彼は全く平気だった。相変わらずの様子でうきうきとしていた。そうして放課後になる。彼も外見を万全に整え体育館裏に向かうのであった。
「決まるぜ」
「決まったじゃないのかよ」
「決まるんだよ、この場合は」
しかし彼はクラスメイト達の突っ込みにこう返す。
「俺が神藤さんとな」
「そういうことか」
「日本語って難しいな」
「やっと神藤さんに相応しい男になれたんだ」
そこまでの超人的な努力も。彼にとっては何でもないのだった。憧れの女神とも言うべき神藤さんと告白する為にはどうということはなかった。
「だからさ。決まるんだよ」
「まあ頑張りな」
「向こうにも気持ちは伝わってるしな」
「もうなのか」
やはり気付いてはいなかった。
「神藤さんにも」
「いいから早く行け」
「体育館裏にな」
「ああ、わかった」
そう応えて体育館裏に向かう。
「それじゃあ。決めてくるな」
「ああ。しかし」
敬三が行ったところで皆は言うのだった。
「あいつ、本当に気付いていないみたいだな」
「そうみたいだな」

彼等もとっくの昔に気付いていたのだった。
「鈍感っていうか」
「やっぱり馬鹿なんだろ」
結論はすぐにそこに落ち着く。
「自分だけで暴れてるだけだしな」
「そうだよな。暴走馬鹿は大変だぜ」
「全くだ」
そんな話をしながら彼が体育館裏に行くのを見送る。実は彼等にはことの行く末がはっきりと見えていた。だがそれは敬三にはあえて言わないのであった。
その体育館裏に敬三が行くと。そこにはもう神藤さんがいた。
「神藤さん」
「はい」
神藤さんは最初から敬三を見ていた。そうして彼の言葉に応えてにこりと笑うのであった。
「ここでいいんですよね」
「はい、ここです」
見れば神藤さんは普段よりさらに奇麗だった。それを見て敬三は笑顔になる。

第四章

「体育館裏に何かありますか？」
「あります」
敬三はいつもの調子で言葉を返した。
「それは」
「それは」
「愛です！」
彼はまたしても高らかに叫んだ。
「愛こそがここにあるんです」
「愛、ですか」
「そうなんです」
彼は言う。
「あの、神藤さん」
「はい、何か」
「実はですね。俺は」
そのままの勢いで神藤さんに言う。
「神藤さんのことが好きなんです」
「私のことがですか」
「はい、ですから」
その強烈な勢いのまま告白を続ける。
「俺と。付き合ってくれますか」
「相良君と」
「そうしたら、俺」
そして言う。
「最高に幸せです。他に何もいりません」
「わかりました」
敬三のその言葉を受けて。相良さんもにこりと笑うのだった。
「それじゃあ。私でよければ」

「いいんですね」
「はい。それでまず最初は」
神藤さんの言葉であった。
「最初は？」
「デートからはじめませんか？」
「は、はい」
敬三は顔を真っ赤にさせて神藤さんの言葉に頷くのだった。
「喜んで」
「じゃあまずは一緒に帰りましょう」
「それがデートなんですね」
「そうです。宜しければ」
また敬三に対して言うのだった。
「これから行き帰りは毎日。それで宜しいでしょうか」
「俺は構いません。っていうか」
敬三はすぐに言葉を変えるのだった。有頂天になっているのがその言葉の調子からすぐわかる。本当に嬉しそうなのが傍目からもわかる。
「是非御願いします」
「はい。それでは」
こうして二人で行くことになった。敬三は有頂天で神藤さんと一緒に学校を帰る。それから毎日行き帰りは二人一緒だった。他にも色々な場所を巡って楽しんでいた。敬三は幸せの絶頂にあった。しかしその絶頂の中にあったのは彼だけではなかったのである。
「どう、最近」
「毎日が楽しいわ」
神藤さんは自分の部屋で携帯でクラスメイトと話をしていた。薄いピンクのベッドの上で赤いパジャマを着て話をしている。
「だって。望みが適ったから」
「そうよね。ずっと待ってたしね」
「何度も思ったのよ」

神藤さんはここで困った顔になった。声にもそれが出る。
「私から言おうって思って」
「そうよね。向こうが全然動かないから」
クラスメイトも言う。
「こっちからって」
「けれど動くって思ってはいたわ」
それでも神藤さんはこうも思っていたのだった。
「だって。相良君だから」
「絶対にこっちに突っ込んで来るってね」
クラスメイトもそれに応える。
「思っていたわよね」
「そういうこと。私の方から言うのは」
「ああ、それは駄目よ」
クラスメイトは笑ってそれは否定するのだった。
「だって。あれよ」
「そうね、あれね」
神藤さんも言う。
「向こうが必死に頑張ってるんだから。こっちはそれを受け止めないと」
「そこで自分から動いたら駄目なのよ」
クラスメイトの言葉には深い読みがあった。
「向こうが突っ込んできたら」
「こっちはそれを受け止める」
「それが女の子ってやつなのよ」
そういうことであった。これは駆け引きなのであった。
「言った通りになったでしょ」
「ええ。けれどね」
ここで神藤さんはまた言うのだった。
「何かしら」
「向こうは全然気付いていないわよ」

これもはっきりわかっていた。
「私の気持ちに」
「それは最初からわかっていたわ」
クラスメイトにとってはこれは既に頭の中に完全に入っていることであった。
「もう完全にね」
「そうよね。だからあれだけ暴走したのね」
「一人相撲ね」
クラスメイトの女の子は敬三の行動をこう評するのであった。
「あんたの気持ちに全然気付いていなかったし」
「そうね。私はずっと待っていたのに」
それが少し寂しくもあった。しかしそれでも悪い気はしないのは事実であった。
「けれどそれでも」
「悪い気はしないでしょ」
「ええ」
そしてそれを言葉でも認めるのであった。
「だって。あそこまで想われたらね。誰だって」
「そういうことよ。じゃあ後は」
「ええ。ずっと相良君と一緒にいるわ」
敬三のことが好きだからだ。だから彼女もそれに応えるのだった。敬三の自分への気持ちと自分の敬三への気持ちに。応えるのであった。
「ずっとね」
「頑張りなさいね。何かと大変な彼だけれど」
「ええ、わかったわ」
ここまで言うと笑顔で電話を切る。そうして自分の机を見てそこにある敬三の笑顔の写真を見てにこりと笑って微笑んで言う言葉は。
「これからずっと一緒よ」
その笑みは敬三だけに贈る笑みであった。それも昔から。けれど

それはあえて言わない。今までもこれからも。あえて敬三には知らせないのであった。

一人相撲　　完

２００８・１・４

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7676d/

一人相撲

2010年10月8日15時27分発行